

鳥取県の子守唄

- 下総皖一の日本音階に着目して -

鈴木慎一郎*

On Lullaby in Tottori Prefecture:
Focusing on Japanese Scale by SHIMOFUSA Kanichi

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：鳥取県，子守唄，日本音階，下総皖一

Key Words: Tottori Prefecture, Lullaby, Japanese Scale, SHIMOFUSA Kanichi

はじめに

本稿の目的は、鳥取県の子守唄の特徴を日本音階に着目して概観した後、《江戸子守唄》との比較を通して子守唄の伝播・変遷の状況を明らかにすることである。

これまでに筆者は、《岡崎の子守唄》を原曲と考えられる《江戸子守唄》を取り上げ、1941（昭和16）年の国民学校第1学年芸能科音楽教科書である『ウタノホン上』に《コモリウタ》として掲載されたことにより、全国への教材化が図られた点を指摘した。さらに教師用指導書である『ウタノホン上教師用』、鑑賞用のSPレコードの分析に基づき、当時の《江戸子守唄》の指導法についても解明した¹。

《江戸子守唄》は、教科書に掲載される以前の江戸時代に江戸で唄われ、参勤交代等で地方へ伝播・変遷したといわれている。では、「陸の孤島」ともいわれた鳥取県においても伝播されたのであろうか。本稿では、鳥取県の子守唄の特徴を日本音階に着目して概観した後、《江戸子守唄》の伝播・変遷の状況を明らかにしたい。

研究方法として第一に、『ウタノホン上教師用』等で説明されている日本音階を分析する。第二に、鳥取県の子守唄を整理する。第三に、《江戸子守唄》と鳥取県の子守唄を比較・考察する。

I. 日本音階

1. 下総皖一

現在の教科書において、日本音階は、小泉文夫（1927-1983）が提唱した「都節音階、律音階、民謡音階、沖縄音階」によって説明されている（譜例1）。これに基づいて、小学校第5学年の共通教材である《江戸子守唄》（《子もり歌》日本古謡）を分析すると、一致しない音が登場する。その原因としては、《江戸子守唄》は、1941（昭和16）年発行の『ウタノホン上教師用』や1943（昭和18）年発行の『師範音楽本科用巻一』に掲載されている日本音階に基づき編曲されているからである。日本音階の箇所を執筆したのは、下総皖一（1898-1962）である。下総皖一は国民学校の芸能科音楽教科書ならびに『師範音楽本科用巻一』の編集委員であった²。

表1に示した通り、埼玉県師範学校を卒業した下総皖一は、1920（大正9）年、東京音楽学校甲種師範科を卒業し、新潟県長岡女子師範学校に着任した。1924（大正13）年、栃木県師範学校に異動以降、東京音楽学校教授であった信時潔（1887-1965）に師事し、作曲法を学ぶ³。1932（昭和7）年、ベルリンに留学し、ヒンデミット（Hindemith, Paul, 1895-1963）に師事した。1934（昭和9）年、東京音楽学校助教となる⁴。

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

したがって本稿では、下総統一の日本音階に基づき、分析を進める。下総統一に関する先行研究について、本多佐保美 (2016) があるものの、『師範音楽本科用巻一』については、取り上げていない⁵⁾。



出典 小原光一『中学生の音楽1』教育芸術社、2021年、p. 63。

譜例 1 中学校教科書における日本の音階

表 1 下総統一の生涯

年	内容
1898(明治 31)	3月31日生
1917(大正 6)	埼玉県師範学校卒業 東京音楽学校甲種師範科入学
1920(大正 9)	東京音楽学校甲種師範科卒業 新潟県長岡女子師範学校教諭兼訓導
1921(大正 10)	秋田県師範学校訓導, 秋田県立秋田高等女学校音楽科教授嘱託
1922(大正 11)	岩手県師範学校教諭兼訓導
1924(大正 13)	栃木県師範学校教諭兼訓導
1927(昭和 2)	成城小学校訓導
1928(昭和 3)	東京府立第九中学校唱歌科授業嘱託
1929(昭和 4)	帝国音楽学校教員(4-12月)
1930(昭和 5)	武蔵野音楽学校教員
1932(昭和 7)	文部省在外研究員としてドイツ在留
1934(昭和 9)	東京音楽学校教務嘱託。→講師嘱託 →助教授
1942(昭和 17)	東京音楽学校教授
1949(昭和 24)	東京芸術大学音楽学部教授
1952(昭和 27)	東京芸術大学, 退官
1962(昭和 37)	7月8日没

出典 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年から作成。

2. 日本音階

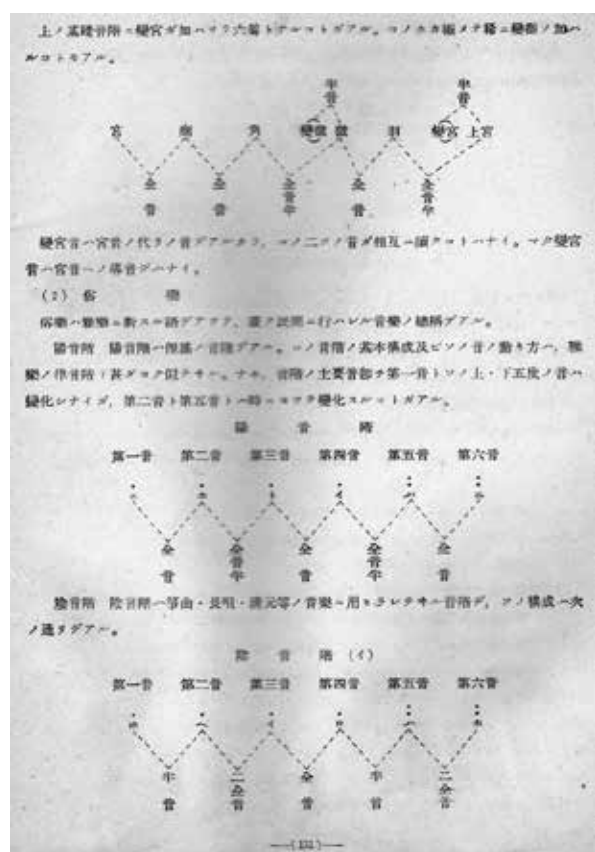
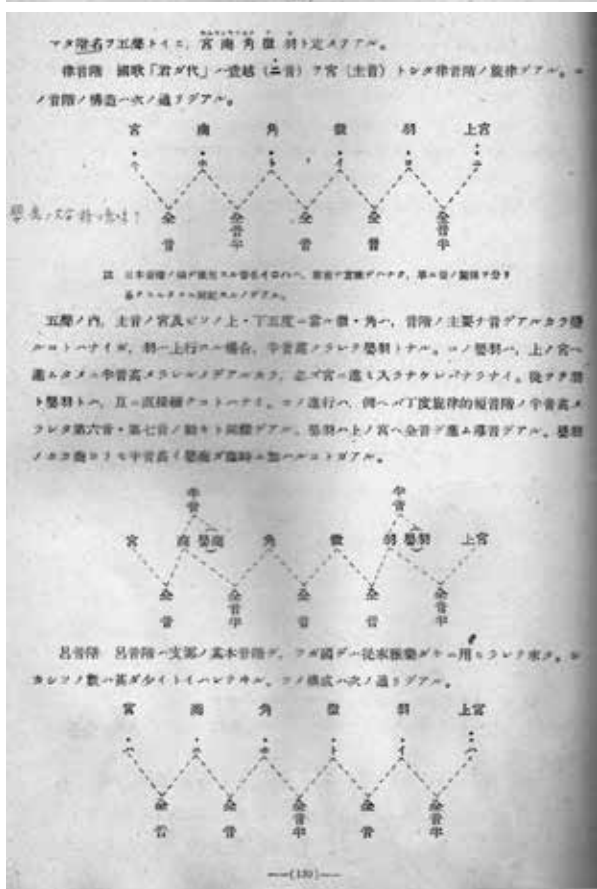
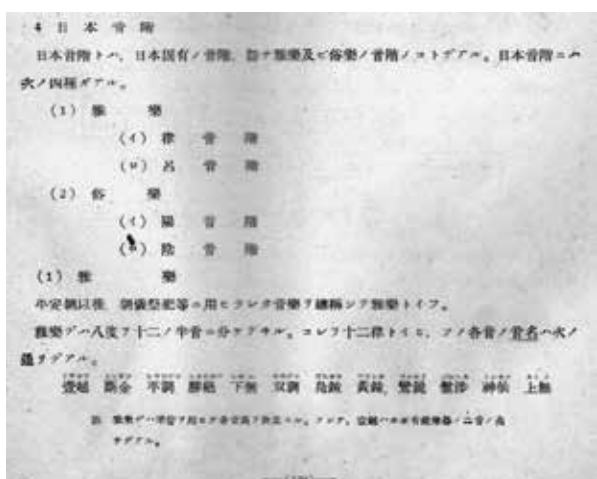
図1は、『ウタノホン上教師用』に掲載されている日本音階である。



出典 文部省『ウタノホン上教師用』大日本図書、1941年、pp. 15-16。

図1 『ウタノホン上教師用』における日本音階

府県立中等学校であった師範学校が、1943(昭和18)年、官立専門学校へと昇格する。教科書も国定へと変わった際に作成させたのが、『師範音楽本科用巻一』である。儀式唱歌に続き、「歌曲、基本練習、音楽理論、日本音楽史」で構成される。「音楽理論」は「1楽典、2和声」で構成され、「日本音階」は「1楽典」の中で、図2の通り、説明される(pp. 129-133)。



出典 文部省『師範音楽本科用卷一』1943年，師範学校教科書，pp.129-132。

図2 『師範音楽本科用卷一』における日本音階

上記の通り、『師範音楽本科用卷一』では、「宮商角徵羽」と音名のみで日本音階を示していたため、筆者により五線譜にしたものが、譜例2から6まで

である。



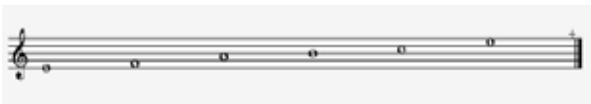
譜例 2 律音階



譜例 3 呂音階



譜例 4 陽音階



譜例 5 陰音階 (イ)



譜例 6 陰音階 (ロ)

『ウタノホン上教師用』、『師範音楽本科用巻一』ともに、日本音階を以下の通り、分類している。

- (1) 雅楽
 - (イ) 律音階
 - (ロ) 呂音階
- (2) 俗楽
 - (イ) 陽音階
 - (ロ) 陰音階

1895(明治28)年発行の上原六四郎『俗楽旋律考』では、以下の通り、言及される⁶。

西楽ニ長短ノ二音階アルガ如ク俗楽ニモ亦此二旋法アリテ両者全ク性質ヲ異ニスルニ因リ予ハ都節ノ音階ニ陰旋ノ名ヲ命シ田舎節ノ音階ニ陽旋ノ称ヲ與ヘテ之ガ区別ヲ試ム

陽音階, 陰音階については、『ウタノホン上教師用』では、以下の通り、記される⁷。

「陽音階」は、雅楽の「律」の音階に類似して居り、「陰音階」は、西洋音楽の短音階が長音階に対すると同様に、之と同主音階の関係になつて居ると思はれる。この二つの音階に於ても、旋律の進行上、その上行下行に際して嬰や変の変化をなすことがあるが、その様式は、雅楽音階の場合と同様である。

『師範音楽本科用巻一』では、以下の通り、解説される⁸。

陽音階ハ俚謡ノ音階デアル。コノ音階ノ基本構成及ビソノ音ノ動キ方ハ、雅楽ノ律音階ト甚ダヨク似テキル。ナオ、音階ノ主要音即チ第一音トソノ上・下五度ノ音ハ変化シナイガ、第二音ト第五音トハ時ニヨツテ変化スルコトガアル。

陰音階ハ箏曲・長唄・清元等ノ音楽ニ用ヒラレテキル音階。

陰音階ノ第二音ト第五音トハ陽音階ヨリソレゾレ半音低クナツテキル。

陽音階に関しては、『ウタノホン上教師用』では、ト調陽音階、『師範音楽本科用巻一』ではニ調陽音階と主音は異なるが、どちらも長2度・短3度・長2度・短3度・長2度で構成されている。下総は『日本音階の話』において、陽音階を「第一種音階」と「第二種音階」(譜例7)に分けているものの、上記では「第一種音階」のみしか取り上げていない。



出典 下総皖一『日本音階の話』楽苑社、1944年、p. 41。

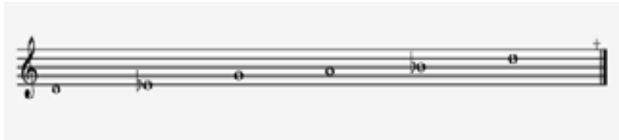
譜例 7 第二種音階

陰音階に関しては、『ウタノホン上教師用』では、ト調陰音階、『師範音楽本科用巻一』では2種類のホ調陰音階が掲載されている。「陰音階(イ)」は、短2度・長3度・長2度・短2度・長3度、「陰音階(ロ)」は、短2度・長3度・長2度・短3度・長2度で構

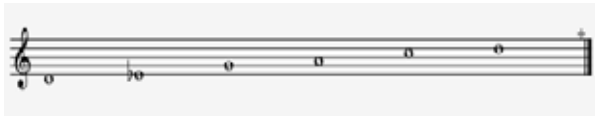
成され、第5音が異なる。『ウタノホン上教師用』では、主音が異なるものの、「陰音階（イ）」で構成されている。

『ウタノホン上教師用』における《江戸子守唄》は、陰音階はなく、ニ調陽音階のみ掲載されている。この点について以下の通り、説明される⁹。

地方により、場合によつて、この楽曲の「イ音」を「変イ音」とし、「ホ音」を「変ホ音」とした陰音階のものが、同じ歌詞で歌はれて居るが為にややもすると、歌はせて居る間に、その陰音階のやうな傾向になることがあるから、注意して指導しなければならない。



譜例 8 ニ調陰音階（イ）



譜例 9 ニ調陰音階（ロ）

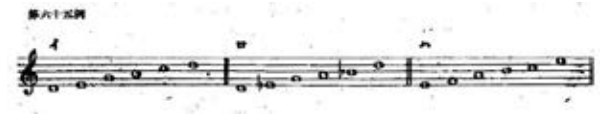
ニ調陽音階に関しては、『師範音楽本科用巻一』等に掲載されている陽音階の譜例2と一致する。陰音階に関しては、『師範音楽本科用巻一』では主音がホ音のホ調陰音階であったため（譜例5, 6）、ニ調に移調したものが譜例8, 9である。《江戸子守唄》（譜例12）の旋律には変ロ音はなく、ハ音が使用され、「陰音階（ロ）」（譜例9）に近いが、イ音ではなく、変イ音となっている。これについて下総は『日本音階の話』の中で次のように説明する¹⁰。

陰の音階の変形の形であつて、音階の変形は、第六十二例のホの音とイの音が半音下つた特別の形である。



出典 下総皖一『日本音階の話』楽苑社、1944年、p. 56。

譜例 10 第六十二例



出典 下総皖一『日本音階の話』楽苑社、1944年、p. 62。

譜例 11 第六十五例



出典 下総皖一『日本音階の話』楽苑社、1944年、p. 57。

譜例 12 第六十四例《子守歌》

参考までに町田嘉章は《江戸子守唄》に関して、上原六四郎『俗楽旋律考』（1895）の音階（譜例13）に基づき、分析している¹¹。譜例14に示した通り、括弧付きで変イ音と変ホ音が記載され、下総と使用されている音は同じである。しかし音階に関しては、譜例13に基づき、「陰旋（都節）」と「陽旋（田舎節）」と解析し、主音をト音とし、下総と解釈が異なる。



出典 町田嘉章「日本民謡の旋法並旋律型を論ず」『東亜音楽論叢』山一書房、1943年、p. 672。

譜例 13 陰旋（都節）・陽旋（田舎節）



出典 町田嘉章「日本民謡の旋法並旋律型を論ず」
『東亜音楽論叢』山一書房、1943年、p. 673。

譜例 14 子守唄 (各地方共通)

宮内基弥(2014)は「陽音階においては一般にその主音の位置が曖昧なため、何かしら楽曲に対する音階の設定について非常に錯綜した状態があり現在まで続いている」と指摘する¹²。宮内は《江戸子守唄》の主音をト音ないしはニ音とし、核音であるト音とニ音が含まれている根拠から、G調第1陽音階(ト調陽音階)と分析する¹³。

譜例 15 に示した通り、現在使用されている、教育芸術社発行の『小学生の音楽5』の教科書では、《江戸子守唄》の主音をト音としている¹⁴。ト音を主音とした場合、陽音階を律音階、陰音階を都節音階として小泉の音階に当てはめても一致する。しかし小泉自身は《江戸子守唄》の主音をニ音と解釈している¹⁵。また、小泉は「下総氏の研究は要点をついた正しい方法によっている点でもっとも注目されてよい」と評価する¹⁶。なお、教育出版では、「都節のテトラコード」と「律のテトラコード」による二つの旋律があることについては解説されているものの、主音については触れていない¹⁷。



出典 小原光一『小学生の音楽5』教育芸術社、2020年、p. 85。

譜例 15 小学校教科書における日本の音階

下総は旋律の最後の終止音を主音としている。小島美子は下総について「戦前の音階論の中でもっとも注目されるべき業績」と評価する一方、陽音階の分析を批判し、中間音を主音とすべきと主張する¹⁸。宮内の指摘している通り、陽音階の主音については錯綜しているが、本稿では、下総の日本音階に基づき、考察していきたい。

以上、《江戸子守唄》は、1974(昭和49)年版教科書以降、一部、8分休符に修正されたリズムに変更されたもの¹⁹、ニ調陽音階、ニ調陰音階で構成されたものが、共通教材として歌い継がれている。

II. 鳥取県の子守唄

1. 鳥取県の子守唄

尾原昭夫(2007)は日本の子守唄における音階の特性と分布について調査した。小泉の「民謡音階、律音階、都節音階、琉球音階」の他に、ハ長調の第4音と第7音を抜いた「呂音階」、イ短調の第4音と第7音を抜いた「呂陰音階」も加え、6種類に基づき、考察した。それによると、鳥取県では、民謡音階が高い比率で使用されていた²⁰。

表2は、1985(昭和60)年発行の『鳥取のわらべ歌』に所収されている全11曲の子守唄を一覧にしたものである。

特筆すべき点としては、一般的に地域で唄われていた子守唄は、陰音階が多いとされていたのにもかかわらず、すべて陽音階であった点である。内訳はイ調陽音階が9曲、ニ調陽音階が2曲。陽音階は小泉の音階では律音階に該当する。前述の尾原の調査では、民謡音階が高かった結果とは一致しない。

《江戸子守唄》に類似しているのは、5《ねんねんころりよ一》と6《ねんねんころりよ二》である。次項において比較考察していきたい。

表2 鳥取県の子守唄

	曲名	音階	採集地	採集年	伝承者(生年)
1	次郎や太郎や	イ調陽音階	鳥取市福部町	1980(昭和55)	浜戸こよ(1906)
2	ゆうべ生まれた坊主が	イ調陽音階	鳥取市福部町	1980(昭和55)	浜戸こよ(1906)
3	ねんねこねんねこ	イ調陽音階	東伯郡琴浦町	1981(昭和56)	毎田すゑの(1893)
4	ねんねんころろん	イ調陽音階	鳥取市佐治町	1979(昭和54)	福安初子(1915)
5	ねんねんころりよ一	イ調陽音階	鳥取市赤子田町	1980(昭和55)	石川ますゑ(1902)
6	ねんねんころりよ二	ニ調陽音階	鳥取市佐治町	1979(昭和54)	福安初子(1915)
7	ねんねんころりや	ニ調陽音階	八頭郡智頭町	1979(昭和54)	大原寿美子(1907)
8	この子あよい子だ	イ調陽音階	東伯郡湯梨浜町	1980(昭和55)	小林ソヅ(1902)
9	だんなよう聞け	イ調陽音階	鳥取市福部町	1981(昭和56)	小谷登美子(1904)
10	寝た子かわいや	イ調陽音階	境港市芝町	1981(昭和56)	浜田富(1904)
11	関の姉やちゃ	イ調陽音階	米子市富益町	1981(昭和56)	松下ゆきこ(1901)

出典 酒井薫美・尾原昭夫『鳥取のわらべ歌』柳原書店、1985年、pp.196-216から作成。

Ⅲ. 《江戸子守唄》との比較考察

1. 歌詞

表3は、歌詞の比較を一覧にしたものである。《江戸子守唄》にはない歌詞として、《ねんねんころりよ一》では「おきゃがり小法師に 犬張子」、《ねんねんころりよ二》では「鳴るか鳴らぬか 吹いてみよ」が挙げられる。

《江戸子守唄》の歌詞に関して、椎名渉子は以下の八つの型があると指摘する²¹。

- ①「留守」「土産」型
- ②「留守」「土産」「説明」型
- ③「留守」「土産」「挿話」型
- ④「留守」「土産」「働きかけ」型
- ⑤「留守」「土産」「説明」「挿話」型
- ⑥「留守」「土産」「説明」「働きかけ」型
- ⑦「留守」「土産」「挿話」「働きかけ」型
- ⑧「留守」「土産」「説明」「挿話」「働きかけ」型

この分類に基づくと、《江戸子守唄》は①「留守」「土産」型になり、《ねんねんこもりよ一》も同様に①に該当する。《ねんねんこもりよ二》に関しては、④「留守」「土産」「働きかけ」型になる。

椎名は、あやし表現に関して、就寝の意を有する語(「ネン」等)を含む類である「a.ネン類」と含まない類である「b.非ネン類」とに二分して分析する²²。これに基づくと、3曲とも「ねんねんこもりよ」で始まっており、「a.ネン類」に該当する。

椎名は、あやし表現に関して、さらに以下の三つに分類する²³。

- ①純粋反復タイプ
- ②変形反復タイプ
- ③命令文タイプ

この分類に基づくと、就寝を意味する「ねんねん」以外の「ころりよ」が取り入れられているため、3曲とも「②変形反復タイプ」に該当する。

表3 《江戸子守唄》との歌詞の比較

《江戸子守唄》	《ねんねんころりよ一》	《ねんねんころりよ二》
一 ねんねんころりよ おころりよ ぼうやはよいこだ ねんねしな	ねんねんころりよ ねんころり ぼうやのおもりは どこへ行った	一 ねんねんころりよ おころりよ ぼうやはよいこだ ねんねしな
二 ぼうやのおもりは どこへいった あの山越えて 里へいった	あの山越えて 里へ行った 里の土産は 何もろた でんでん太鼓に 笙の笛	二 ねんねんころりよ おころりよ ぼうやのこもりは どこへいった
三 里のみやげに なにもらった でんでんだいこに 笙の笛	おきやがり小法師に 犬張子	三 あの山越えて 里越えて ぼうやのみやげを 買いにいた
		四 里のみやげは なにもろた でんでんだいこに 笙の笛
		五 鳴るか鳴らぬか 吹いてみよ ねんねんころりよ ねんころり

出典 酒井薫美・尾原昭夫『鳥取のわらべ歌』柳原書店、1985年、pp. 202-203 から作成。

2. 音楽

拍子に関しては、《江戸子守唄》と《ねんねんころりよ二》が4分の4拍子に対し、《ねんねんこもりよ一》は4分の2拍子である。小節数は《江戸子守唄》と《ねんねんころりよ二》が8小節に対し、《ねんねんころりよ一》では24小節もある。4分の2拍子のため小節数が多いのだが、仮に4分の4拍子とした場合でも12小節となるため、《江戸子守唄》より多い小節数である。したがって音楽構造については、《ねんねんころりよ二》の方が《江戸子守唄》と共通している。

加藤晴子は、子守唄の歌い出し部分を「平板型、上行型、下降型、山型、谷型」に分類し、分析する²⁴。この方法に基づくと、3曲とも「下降型で開始後

上昇型」と共通し、撥音「ん」の音高が下がった旋律となっている。

音階に関しては、《ねんねんころりよ一》がイ調陽音階、《ねんねんころりよ二》がニ調陽音階となっている。《ねんねんころりよ二》の方が《江戸子守唄》と共通している。

このように、鳥取県においても《江戸子守唄》に類似した子守唄が存在していたことが明らかとなった。ただし、採集年が《ねんねんこもりよ一》が1980（昭和55）年、《ねんねんこもりよ二》が1979（昭和54）年ということなので、学校教育の影響も否定できない。《江戸子守唄》は、1958（昭和33）年告示の小学校学習指導要領において歌唱共通教材として指定された。

ねんねんころりよ(一)

鳥取市赤子田町
採集 酒井薫美
採譜 尾原昭夫

♩ = ♯69

ねんねんころりよ ねんころりよ
 ほうやのおもりはどこへいた
 あやまこえてきとへいた
 さあとのみやげはなにもろいた
 でんでんだいこにしょうのふええ
 おきがりこほしにいぬはりこ

ねんねんころりよ(二)

八頭郡佐治村尾原
採集 酒井薫美
採譜 尾原昭夫

♩ = ♯84

1. ねんねんころりよ おころりよ
 2. ねんねんころりよ おころりよ
 3. あやまのこみやら ねんねんころりよ
 4. さあとのみやげはなにもろいた
 5. なあとのみやげはなにもろいた

ぼうやのはよこりだはねんねんしいな
 ぼうやのはよこりだはねんねんしいな
 ぼうやのはよこりだはねんねんしいな
 ねんねんころりよ ねんねんころりよ

出典 酒井薫美・尾原昭夫『鳥取のわらべ歌』柳原書店，1985年，p. 203。

譜例 16 鳥取県における子守唄

-26- コモリウタ

一 ネンネンコロリヨ オコロリヨ
 ニ パクヤノオモラハドコハツ
 三 ヤートニヤアニナニホ
 アウヤハヨイコダネンネン
 アノヤコイコニシヤヘノ
 アンダグイコニシヤヘノ

出典 文部省『ウタノホン上』大日本図書，1941年，p. 26。

譜例 17 《江戸子守唄》

おわりに

『ウタノホン上教師用』、『師範音楽本科用巻一』の日本音階は、下総皖一によって執筆され、「(1) 雅楽」の「(イ) 律音階、(ロ) 呂音階」、「(2) 俗楽」の「(イ) 陽音階、(ロ) 陰音階」の4種類に分類されていた。これに基づくと、『ウタノホン上教師用』に掲載されていた《江戸子守唄》は、ニ調陽音階となる。

『鳥取のわらべうた』(1985)には、11曲の子守唄が所収され、イ調陽音階が9曲、ニ調陽音階が2曲とすべて陽音階であった。《江戸子守唄》に類似した子守唄も2曲、確認できた。

ところで本多は、小泉文夫らが編纂した1966(昭和41)年、東京書籍発行の中学校音楽教科書『新編

新しい音楽』を取り上げ、「陽音階、陰音階、律音階、琉球音階」の順で、3年間を通し、順序立った系統的な日本音階の指導が考えられていたと分析する²⁵。前述の通り、現在の音楽教科書では、小泉文夫の提唱する音階が取り上げられている。戦後の音楽教科書において、日本音階がどのような変遷で取り扱われたかについては、今後も追及していきたい。

付記

本研究は JSPS 科研費 21K0246 の助成を受けた。

本稿は関西楽理研究会第193回例会(2023年7月、於：京都教育大学)における口頭発表の内容を発展させたものである。

- 1 鈴木慎一郎「《江戸子守唄》の特質：《岡崎の子守唄》との比較・『ウタノホン上教師用』の分析から」『白梅学園大学・短期大学紀要』第46号、白梅学園大学・短期大学、2010年、pp.15-31。
- 2 鈴木慎一郎『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』兵庫教育大学大学院博士論文、2006年、pp.86-94。
- 3 鈴木慎一郎『師範音楽』(1943)における歌曲についての一考察：信時潔作曲《白楽天》を中心に」『芸術教育実践学5』芸術教育実践学会、2004年、pp.16-23。
- 4 富樫康『日本の作曲家』音楽之友社、1956年、pp.173-176。
細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』日外アソシエーツ、2008年、pp.348-349。
仲辻真帆「1930年代前半の東京音楽学校における作曲教育：学校資料と初期卒業生の資料にみる本科作曲部の様相」『音楽学』第65巻1号、日本音楽学会、2019年、pp.45-46。
- 5 本多佐保美「昭和10～20年代における下総皖一の日本音階論」『千葉大学教育学部研究紀要』第64巻、千葉大学、2016年、pp.333-337。
- 6 上原六四郎『俗楽旋律考』金港堂書籍、1895年、p.79。
- 7 文部省『ウタノホン上教師用』大日本図書、1941年、p.16。
- 8 文部省『師範音楽本科用巻一』師範学校教科書、1943年、pp.131-132。
- 9 文部省、前掲書、1941年、p.112。
- 10 下総皖一『日本音階の話』楽苑社、1944年、p.57。
- 11 町田嘉章「日本民謡の旋法並旋律型を論ず(日本民謡形態論の中の「曲型編」)」岸邊成雄編『田邊先生還暦記念東亜音楽論叢』山一書房、1943年、pp.672-673。
- 12 宮内基弥「小泉文夫の民謡音階について：東北

- 地方の三味線を題材に」『東京芸術大学音楽学部紀要』40巻、東京芸術大学、2014年、p.109。
- 13 同書、p.110。
- 14 小原光一ほか『小学生の音楽5』教育芸術社、2020年、p.85。
- 15 小泉文夫『合本 日本伝統音楽の研究』音楽之友社、2009年、p.190。
- 16 同書、pp.33-34。
- 17 教育出版株式会社編集局編『小学音楽 音楽のおくりもの5 教師用指導書 研究編』2020年、教育出版、p.76。
- 18 小島美子「伝統音楽における音階論の歴史」東洋音楽学会編『日本の音階』音楽之友社、1982年、pp.33-34。
- 19 本多佐保美「音楽教科書にみる日本伝統音楽教材の取扱い」音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』開成出版、2006年、p.127。
- 20 尾原昭夫「日本の子守唄における音階の特性と分布について」『民俗音楽研究』第32号、日本民俗音楽学会、2007年、pp.11-21。
- 21 椎名渉子「子守歌の詞章構造と地域差：江戸子守歌を対象として」『国語学研究』46号、「国語学研究」刊行会、2007年、p.50。
- 22 椎名渉子「子守歌詞章におけるあやし表現の形態的・構造的特徴と地域差」『フェリス女学院大学文学部紀要』52巻、フェリス女学院大学、2017年、pp.4-5。
- 23 同書、pp.5-12。
- 24 加藤晴子「『こもりうた』にみる音楽教育的機能：音楽感覚の形成を視点とした教育実践への提案」兵庫教育大学大学院博士論文、2003年、p.59。
- 25 本多佐保美「昭和40年代中学校音楽教科書にみる日本伝統音楽の取扱い：小泉文夫編集教科書における日本音階の学習指導を中心に」『千葉大学教育学部研究紀要』第65巻、千葉大学、2017年、pp.7-13。